

9月12日「憐れみの道へ」マタイ18：21～35

ペトロはイエスに尋ねた。「何回まで赦しましょうか？7回までですか？」ペトロはどんな顔で聞いたのでしょうか？多分「ドヤ顔」だったと思う。なぜなら当時、ユダヤ教では、3度までは兄弟姉妹の罪を赦すよう勧められていたからです。日本でも「仏の顔も三度まで」と言いますね。「世間一般には3回というけれど、イエス様は散々赦すようにって話されたのだから、7回と言っておこう。喜んで褒めてくれるだろう！」そんなドヤ顔でペトロは尋ねたことでしょうか。ところが、イエス様の返事は、予想の斜め上を行くものでした。「7回どころか7の70倍(490回という意味ではなく無制限にの意)までも赦しなさい！」ちょっと周りの人たちはぶったまげたと思います。「まじかよ！ありえない！？」そこでイエスはこの譬えを話されました。

ある王が家来たちに貸した金の決済を始めます。その中に1万タラントも借金のある者がいました。王は自分自身も妻も子も持ち物も何もかもを売って返済するように迫ります(それでも全く足りないのですが・・・)。けれども、家来がひれ伏し「どうか待ってください。きっと全部お返しします」というので、王は彼を憐れに思い、借金を全部帳消しにしてやることにしました。ところが、この家来は自分にたった100デナリオンの借金のある仲間を捕まえるとその懇願も無視して牢屋へぶち込んでしまったのです。周りで聴いていた家来たちがこの事件を王に伝えると王は「わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか」そう怒って不屈きな家来を牢役人に引き渡してしまいました。

この譬えで王が誰であるかは分かると思います。そう、神さまです。そして王に借金のある家来が私たちですね。私たちは神様に赦して頂いている。神さまが最も大切な御子を十字架に付けて、復活させられたことを通して赦されています。そんなことはキリスト者であれば、自明のことです。それなのに、他者が私たちに借りを作った場合には恐ろしいほど不寛容になるのです。私たちも赦されているのだから、赦そうというのがこの譬えの趣旨というのは理解できると思います。

今日、もう一か所選ばれていたのはヤコブの手紙でした。ヤコブ書2章はなかなか私たちにとって現実的と言いましょか、こんなことが書かれています。「わたしの兄弟たち、自分は信仰を持っていると言う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つでしょうか。そのような信仰が、彼を救うことができるでしょうか。」信仰に行為が伴わないならばそれは信仰していると言えるのか?と問うのです。例として着る物もなく、お腹を空かせて困っている兄弟姉妹が目の前に居たとして、その人に「温まって満腹していきなさい」と口で言うだけで、必要なものを何一つ与えないならば、それは隣人を愛していることにはならないと言います。それはそうでしょう。せめて自分のできる範囲で、何か差し出すことが隣人を愛することだと私も思います。これは私自身が本当に大切だと思う問いかけです。信仰とは単なる「思想」や「幸せに生きるためのレシピ」とは異なります。単に教会に来て、お話を聴いて、歌を歌って、心穏やかに生活する・・・というところに留まらないと思います。私たちの生き方そのものです。ヤコブ2章では当時の教会でお金持ちと貧しい人が異なる待遇を受けていることを問題視しています。私たちには元来差別意識があり、他者を見た目や、職業や、地位で、差別し、優劣を測り人を分け隔てようとします。けれども、本当に信仰的に生きるならば、イエスが示されたことを信じて生きるならば、私たちは自身のそういった「罪深い本質」を乗り越えて、教会では金持ちも貧しい人も関係なく公平に扱われるべきではないかと問うのです。「憐れみは裁きに打ち勝つのです!」とはそういう意味です。信仰とは愛の無かった私たちを憐れみある者へと変えていく、そんな「力」のあるものだというのです。パウロは「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です(ローマ12:1)」と勧めています。信仰とはそうやって「生きた」ものだと私も信じています。

しかし、そこでもう一つ別の「問い」が立てられます。そうなる「行為」が偉いのか?ということ。自分自身の行為が信仰を表すのであれば、私たちの信仰の強弱や優劣が行為によって測られてしまう。行為の「あ

る・なし」で「救われる・救われない」が分かれるのか？ということです。いや、そうではない「信仰によって救われているはずだ！」とは宗教改革でルターが問うたことでした。そして今日の譬えが表面上孕んでいると思われる課題も実はそこにあるように思います。「35 節 あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう」と言われています。こう言われると、私たちは自分が裁かれないように、将来の救いを得るために他者を赦すようにならないでしょうか？まるで自分の赦すという行いによって将来の救いを勝ち取ったように・・・

ここで、もう一度、譬えに戻ってみたい。王が家来の借金を帳消しにしてやります。いくらか？一万タラントン。これどれくらいの金額なのでしょう・・・？換算するのは難しいですが、日給を5000円で計算すると3000億円。当時のヘロデ王が領地から集めた年貢全部が200タラントン、その父悪名高きヘロデ大王の年収が900タラントンだったという記録が残っているらしいので。あり得ないほどの借りがあったのです。それに対して、家来が貸してやっていた金額はどれくらいか100デナリオン。こちらは現実的な額で先ほどと同じ単位で換算すると50万くらいです。少なくはないけれども、何とか働けば返せます。この譬えの本質はここにあるのではないのでしょうか？人間同士の恩着せがましいやりとり（ほんの少しの恩に対して過大に要求するような）とは訳が違います。神様は私たちにはあり得ない金額、全く自分では何をどうしようもない借金をすべて帳消しにしてくださっているのです！それにも関わらず、ほんの少しの他者の負い目がやはり気になる・・・どうしてか？私たちは許されていることを忘れるからです。「ちょっと反省するそぶりを見せれば、赦してくれるんだからちょろいもんだぜ」家来はそんなことを思ったのかもしれませんが。そこで、自分が本当はどれほど大目に見て貰っているのか、王の愛がどれほど深いか気付いていないのです！もし家来がこの圧倒的な金額の差を受け入れていたならば、とる道は一つだったのではないのでしょうか？心から感謝して神様の赦しを受け入れるのです。そして、神さまがし

てくださったように、私たちも他者に対して行おうとするのです。その一択しかありえないでしょう。こうして私たちは裁きの道から、憐れみの道へと招かれているのです。

今日、私たちの教会は本当に喜ばしい洗礼式を行います。少し、ご本人の了承をいただいたので、洗礼式へと至った経緯をお話しさせていただきますが、まず、お連れ合いの長年の祈りがありました。また、20年に及ぶ家庭集会を通して少しずつ心が神様の方へと向けられていったとも語っていただきました。特に最近、高齢になり、ご夫妻での生活の上で、高齢ゆえの色々な課題と出会うようになった。その時に、年齢やそれに伴う病気のせいであり、どうしようもないことだとわかっているにもかかわらず受け入れられない。赦したいけれども、赦せない不寛容なご自身出合い、悩む中で、不思議と神さまにすがり、祈っているご自身に気付かされたとのことでした。多度津教会の役員会は全員一致で確かにこの兄弟に神さまの聖霊が働いておられると確信しました。

そうなんです！「赦したくても赦せない」兄弟が行き着かれたように私たちは自分の力だけでは到底人を赦すことなどできないのです。おそらくたとえそれが将来の自分自身の救いのためであっても。私たちの本質にはどうしようもない罪があり、赦すより裁く者なのです。けれども、そこからもう一步、変えられることがある。自分が本当に赦されていると気づいた時です。洗礼準備会の中で、高齢ゆえにお連れ合いに頼れなくなった時に、今までどれほど妻がしてくれていたかにも気づかされ感謝したことがあったとお話してくださいました。自分に注がれていた愛に気付くとき、自分の力よりもはるかに大いなる存在が私たちを愛してくれていると気づく時に、私たちは変わることがあるのです。神の赦しとはそうやって私たちの弱さを受け入れ、乗り越えさせてくださるものなのだ！今日、その神の赦しを受け取って、私たちの共同体に加わる方が与えられました。本当に嬉しいこと。一緒に喜び合いたい！